

「消化管内圧測定法」

東北大学教授 葛 西 森 夫 監修

奈良医科大学教授

白 鳥 常 男

まず冒頭に、渴望久しかった単行本「消化管内圧測定法」の出版を歓迎し、その価値の高い内容と有用性を評価し、率直に双手を挙げて賛辞と敬意を表し、本書に感銘を深めた二、三のことを述べてみます。

第一に、これから始めようとする初歩の方には何よりの手引きとして、これまで従事されてこられた方に対しては現在の水準を見極めて、将来への発展のために極めて有用な、いわゆる“消化管内圧測定のすべて”といった単行本であることを感じました。これまで消化管の内圧測定に関しては、生理学書や、小児外科、外科、内科などの臨床の単行本の中で、断片的に取り上げられ、簡単な記載を見るにすぎませんでした。

本書では測定部位の解剖、機能、測定法とその実際に至るまで、詳細

に、かつわかりやすく書かれています。すなわち、本書を読むことにより、内圧測定上のすべての知識を知り、不安なく測定が行われ、正確に測定成績を得ることができると思われます。

第二には格調、水準の高い権威ある専門書であることです。直腸肛門内圧研究会(小児消化管内圧研究会)から出発し、食道内圧、更に消化管全般の内圧へとその領域を拡張、また内容的には基礎的なことから臨床応用を中心にしたものへと進展させ、測定法の統一、判定基準の作成などにも考慮を払うなど長い間の研究と検討の結果得られた成果を背景にして、必然的に生まれた単行本と言えます。また執筆には、この領域を代表するわが国の権威ある専門家が網羅されている点からも、本書の

内容の素晴らしさが窺われます。

消化管の運動機能に関する研究は、欧米に比べわが国が一步先んじていると言われていますが、本書の内容も諸外国に比し進んでいることは明らかで、英文にて出版しても欧米に通用する価値は十分あるものと高く評価したいと思います。

第三には、特に下部食道括約機能、および直腸肛門括約機能を理解し、その機能の測定・判断のための知識を得るには本書は絶好の本であり、本書をおいてほかに適切な本は見当たらないと言っても過言ではないでしょう。

最後に、本書の出現によりこの領域の臨床が著しく進歩発展することを信じると共に、消化管内圧研究会を組織され、本単行本発刊にて総括された supervisor としての葛西森夫教授、その強力な推進協力者としての池田恵一、勝俣慶三、岡本英三、鈴木宏志各教授に畏敬の念を表します。

B 5 判 232 頁 図 177 写真 55

原色図 4 1983 年

¥ 7,000 ㊦ 300

医学書院 刊